

第 2 回 DX による利便性向上部会 発言要旨

1 サービスの DX		
1	レファレンスサービスのデータベース構築については、すぐにやっていただきたいと思っています。データベースを構築することによってどういった使われ方をしているのかとか、どういう領域にニーズがあるかという分析もしやすくなると思います。これからの図書館というのは、やはりそういったデータを使って分析して活用していくことが求められますので、これは早急に手をつけていただきたいと思っています。	橋委員
2	レファレンスサービスは「サービスの DX」に入っていますが、今後オンラインレファレンスのような形になったとき、実はもっと問合せの件数が増えなければいけないと思います。攻めの DX だったら増やすことに向かっているけれども、もう一つ、例えば守りの DX として、職員やスタッフの労力との関係というのも本来あると思います。サービスの DX の 1 番目に置くのであれば、いかに問合せを増やしていくかという議論はあっていいと思います。	植村委員
3	デジタルブックシェルフを V R の図書館と組み合わせるとか、できるといいのになと思います。	関根委員
4	視覚障害者が本当に目が見えなくなったら、スクリーンリーダーの使い方を教えてくれるのは海外では図書館や大学なんですよ。アシステブテクノロジーの情報も全部持っている。例えば、手話と音声による双方向コミュニケーションシステムの「SureTalk」などの情報を全部図書館員が知っているんですよ。どうすれば多様な人とちゃんとコミュニケーションがとれるかとか、その人たちの読書権をどうやったら守れるかということ全て図書館員が分かっていて、その人に合わせた情報提示をしてくれます。	関根委員
5	<p>・「TML Online プラットフォーム」(Tokyo Metropolitan Library Online Platform)</p> <p>今情報がサイロ化して、色々なところに分散してしまっているんで、一括して検索できるようにしましょうという話は以前からあります。さらに付加価値をつけて、今までは図書館に行って文献を複写しないといけなかったのが、著作権法が改正されオンライン上で PDF をリクエストできるようになりますので、それと連動させてはどうかと思いました。デジタルも見られる、物理的な資料も貸し出せるとすれば、物理とデジタルをうまく使えるという都立の強みを活かせるのではないのでしょうか。</p> <p>・「東京 One Library」</p> <p>地域の図書館で、例えば港区なら港区の図書館で所蔵していない資料というのは、図書館に行かないと、あるいは書誌情報をウェブ上で細かく入れないと、取寄せのリクエストができないんですよ。今都立で提供している総合目録を使うことができるかはわかりませんが、利用者が自ら検索して予約をつけられるようにしようというものです。</p>	松本部長
2 資料の DX		
6	資料収集管理に関する AI の支援については、特に海外の図書館で実用化に最も近いと言われているのは、目録分類の作成の支援です。	松本部長

7	IFLA（国際図書館連盟）の大会などに行くと、ロボットが書架整理をする、並びが間違っているとところを発見するといった事例がありますので、蔵書管理、コレクションの収集管理で AI を活用していくことは考えられるかなと思いました。	松本部長
8	<p>・地域資料・行政資料のデジタル収集（ウェブアーカイビング）</p> <p>自治体のウェブページのアーカイビングは国立国会図書館がやっているのですが、完全ではないと思います。リンク切れ、特に PDF などはリンクが切れてしまっています。最近はホームページ自体もどんどん削除されており、かつての行政情報を見ようと思っても入手できないことが多々あるので、そういったウェブアーカイビングのようなものがあるとよいと思います。</p> <p>・オープンデータカタログサイト掲載データのアーカイビング</p> <p>都内のオープンデータは東京都がカタログサイトを提供しているわけですが、個々の自治体がリンク先を決めてはいますが、結局どこかの段階で誰かがアーカイビングしていかないと、最新の情報だけは得られるけれども、いつの間にか過去のデータは消えているということになってしまうのは、東京都としてどうなのかというのは少し気になります。</p>	松本部長
3 施設空間の DX		
9	建物を建て替えるまではいなくても、施設を少し作り直さなければいけないと思います。もちろん建物を建て直すときはぜひと思いますけれども、建物も古くなってきていますし、やっぱり今後メイカースペース、ファブスペースみたいなところに対して積極的に東京都がひな形になるようにしていただければよいと思います。	植村委員
10	<p>ファブラボやメイカースペースの設置は、図書館を建て直すときや増改築のときにならざるを得ないでしょうから、そのときにちゃんとそれが提言できるようにあらかじめ言うておくことは大事なと思います。確実にそういうことをしていると、人の動きが変わり、新しくなります。</p> <p>市民は別に「これが図書館、公民館、美術館」とは思わずに各施設に行っているのだとしたら、あそこに行くと面白いよねという新たな需要（物を作りたい、織物をしたい）を作り出していくことができると思います。</p>	植村委員
11	北欧などでは、子ども向けのメイカースペースが結構多いみたいな話を聞いたことがあります。子ども向けで、要するに子どもが簡単にプログラミングできるようなもの、ロボットで動かすようなものなども含めて、メイカースペースの中でやっていたりするみたいです。プログラミング教育とか情報教育とかとも関わってくるのかなという気がするんです。	松本部長 p.34
12	政府としては「ユニバーサルデザイン 2020 行動計画」を出していますので、UDは必ず前提にさせていただきたい。簡単に言えば、日本中をシニアがベビーカーを押してこられる場所にするということです。高齢者がベビーカーを押して、どこへでも動いて回れるまち、使えるものやサービスにしようというのがこの計画の目標です。当然、図書館もその一つとなります。	関根委員
13	ユニバーサルデザインを DX との絡みで言うと、ウェブサイトをちゃんと分かりやすくするとか、アプリを高齢者でも、外国人でも使いやすくするというところに関わってきます。	関根委員

4 マネジメントの DX		
14	DX の分類、6 つの柱を立てていただいたんですけれども、DX でこのアプリをやりますとか、この技術を使って何かをしますとか、いろいろ試してみるだけでは駄目で、1 つやったものを分析して、それをフィードバックして、また改善していくことがデジタルの世界では重要ではないですか。	橋委員
15	既存のものをどうやって広報していくとか、利用者に伝わっていなければそれがどうして伝わっていないのか、どうしたら伝わるのかというところを分析して活用していかないと、せっかくいろんないいものを作ってあまり有用ではなくなってしまうのかなと思うので、DX の柱のどこかに入れる箇所があればいいなと思います。	橋委員
16	ものづくりにしろ、まちづくりや情報、サービスであっても、ユニバーサルデザインのルールというのは 1 回作ってみて、それを PDCA の P と C、Plan と Check の時点で、必ずユーザーに評価してもらって、問題点を抽出し、また次で改善するプロセスです。スパイラルアップと言うんです。 ですから、DX も基本的に使いやすいものを作ろうと思ったら、スパイラルアップの考え方が絶対に必要なので、改善を続けていくプロセスであるということをどこかで明記してほしい気がします。	関根委員
17	例えば常に利用者の情報をとってフィードバックをかけていくとか、見直しをするとか、いわゆるアジャイルプログラミングのように、とにかくすぐ提供してみる。完成版を待つのではなくて、やってみて声を聞きながら直していくみたいなプログラミングが大事だと思います。	植村委員
18	既存の利用者だけでなく新規の利用者に対してとか知らない人に対してどういうふうにアプローチするかということなので、一般の普通の人が見るようなところにきちんと情報をのせてもらうとか、それを発信していくということをしたほうがいいと思います。	橋委員
19	若い子も含め、これから取り込もうとする Z 世代はスマホの中から相談の時代。SNS でこちらから提供していかないと、入ってこないと思います。(p.25) Z 世代というキーワードを載せたほうがいいけれども、実は肝心の Z 世代が一番居るところにたどり着いていない感じがするんですね。(p.27)	植村委員
20	社会教育に関するイベントを総合的に検索できるようなシステムが図書館があれば嬉しいし、そういったシステムの作り方で、本当は図書館で教えてくれるようになるとうれしいですね。DX 人材を育成する場所に、図書館がなってほしいんです。	関根委員
21	システムのこととか IT のこともできるような、少なくともベンダーとどういう設計でやってくださいとか、この見積もりは正しいのかとか、そういうことが分かるような人たちを育てていきなり中途で採用するなり、きちんとしていかないといけないと思います。	橋委員
22	5 年計画とかではなくて、やっぱり短期に DX の部署をきちんと作った上でやるのがよいです。今は多分いろんな部署に IT が得意な方がいらっしゃるのかもしれないですけども、専門の部署を作って、その人たちに図書館全てのシステムとか IT のことをやってもらう。そういうところを作って東京都のデジタルサービス局とか、そういったところともお話ができるような形で育成とか採用を考えていったらいんじゃないかと思います。	橋委員

23	<p>行政の部門全部にも言えることですし、もちろん図書館でも同様だと思うんですけど、ちゃんと CIO (Chief Information Officer) をつけてほしいですね。インフォメーションをこれからどうするんだということをマネジャーとしてルール化できる権限のある人を、必ず 1 人は任命してほしいです。</p>	関根委員
5 DX 推進のリーダー		
24	<p>コンソーシアムの提言は都立図書館が言わなければだめですよ。逆に言うと、区立図書館あたりから言われてしまったら恥ずかしいと思います。</p> <p>かつて海外の学術雑誌・電子ジャーナルなどがそうであったように、これから電子書籍は間違いなく国内のコンソーシアムを作らなければ駄目だと思います。やっぱり利用にでこぼこがありますから、総合的に契約していくということで、東京都が契約しても貸出しは区立図書館であったり市立図書館であったりという関係性を作るほうがいいと思います。東京都から貸し出してしまったら、「電子書籍だから都でいいよね」という議論は、その次に「NDL でいいよね」ということに行ってしまう。各々の住民が見えているところで電子書籍をやっていくというふうにするときに、コンソーシアムについては、都が中心となって東京都間の全ての図書館をつなぐという計画でいいと思います。</p>	植村委員
25	<p>公民館的なサービス、例えばセミナーとか市民の教育とかありますよね。本当はそういうものが調べられるとよいと思うんですよ。</p> <p>ネットを使うと、ごみのような情報も出てきてしまう。東京都がやっているセミナーとか市民のための教育とか、あるいは美術館の展示会とか、期間限定でこんなものがやっているといったことなどが分かるというのが、これからのディスカバリーサービスじゃないかなと思うんですよ。</p>	植村委員
26	<p>まさにデジタルアーカイブで、OAI—PMH でハーベストして、データを取ってくるというイメージなんですけれども、海外とかだと東京都のような組織がまとめ役になって、都内の図書館のデジタルアーカイブのいろいろな取りまとめ、支援も含めてやっている。最終的にはジャパンサーチに行くと思うんですけども、例えば東京都で、そういった東京都内のデジタルアーカイブを探せるような仕組みを簡単におそらく作れるはずなんですよね。</p>	松本部長
27	<p>どこかがリーダーになるという話だと、公共図書館は電子書籍サービスを 1 社だけじゃなくて幾つも入れるそうですが、アプリが幾つも入って不便だという問題があって、たしかニューヨーク公共図書館が一元化するアプリをつくって、そこから全部の電子書籍の個々のアプリに行けるようにしました。提言したのはニューヨーク公共図書館だったんです。</p>	植村委員
28	<p>一回 Peatix でイベントやセミナーに参加を申し込むと、同じようなイベントがあったら教えてくれますよね。図書館のイベントも無料のものを含め、Peatix のようなプラットフォームを使って申し込むようにすれば、もしかすると同じように AI が「あなた、もしかしたらこれに関心ありませんか」と都民に言うようになるのかもしれない。図書館のイベントも、登録は必要ですが、定型化されているし、図書館側はそれほど負担をかけずに都民へのイベント告知ができるようになるかもしれないですね。</p>	関根委員

29	<p>図書館の仕事だ、美術館の仕事だ、公民館の仕事だとあるけれども、デジタルの中では逆にそこはぜひ横断的に手を組んでいただきたい。できれば、こういうときに調べ物は図書館からとやっていただくのが一番いいと思います。</p> <p>どこかがまとめ役をやったときに、公民館のイベントでもほかの美術館のセミナーでも、全部図書館で探せると。もうそれは図書館というイメージすらなくなって、東京メトロサーチでもいいですけども、そういうような形で探せるように作っていくといいと思います。図書館が手を挙げていくとすぐよいと思います。</p>	植村委員
6 プラットフォーム・既存技術の活用		
30	<p><u>都立図書館開発技術の普及</u></p> <p>都立でいろいろ開発したものを、都立が販売しなくてもよいのですけれども、そうしたものをより広めていていただきたいです。</p>	松本部会長